

株式会社セイビ堂

代表取締役 CEO 阿部 慎也 氏



茨城県鹿嶋市に本社、東京と大阪に営業所を構える株式会社セイビ堂は、昭和43年に創業し、今年で創業53年を迎えました。

同社の代表を務める阿部氏は、祖父から受け継いだセイビ堂を、国家プロジェクトにも名を残せる立派な企業として、成長させることができたと自負しています。

同社の成長を支えた個性豊かな社員と広い人脈、斬新なアイデアを形にする技術力についてお話を伺いました。

インタビュー日：2021年2月22日
（聞き手：筑波総研(株) 代表取締役社長 野口稔夫）
（文・写真：筑波総研(株) 主任研究員 富山かなえ）

企業概要

本社・NC工場：茨城県鹿嶋市長栖1879-207
営業本部、第1・2工場：茨城県鹿嶋市長栖2156-93
東京営業所：東京都中央区銀座2-14-2銀座GTビル5F
大阪営業所：大阪府大阪市北区梅田1-1-3
創 業：昭和43年(1968)6月
事業内容：サイン市場調査、サイン計画、サイン設計、サインデザイン、屋内外サインの制作・施工、LEDサイン全般、3Dデザイン映像、コンテンツ製作、デジタルサイネージ、サインの対候性試験など

御社の事業拡大プロセスをお聞かせください。

■ 先代である祖父の背中を見て育つ

当社の歴史は、昭和43年（1968）に、私の祖父・阿部一男が「セイビ堂看板店」を創業したことに始まります。セイビ堂という社名は、祖父の娘、つまり私の母の名前「清美」に由来します。

創業当時から、書道家の顔を持つ祖父の手書き文字看板の評判が高く、小学校の入学式が近づくと、自転車に名前を入れてもらう地元の子どもたちの行列ができていました。

また、祖父は、1文字の大きさが5m×5mもある大きな文字を美しく手書きする高い技術を持っていたため、鹿島臨海工業地帯に立地する大手企業から、倉庫の屋根に文字を書く仕事を請け負っていました。

当時、小学生だった私は、様々な色のペンキを持って一緒に現場についていき、手伝いをしながら、祖父の働く姿を間近で見て育ちました。

しかしその後、祖父が病に倒れ、後継者もいなかったことから、私は阿部家を守るために、家業を継ぐことを決意しました。17歳の時でした。

私は、当時通っていた高校を中退し、パイロットになりたいという夢も捨て、祖父の知人が経営する看板屋で修行することになりました。

■ 最先端技術に活路を見出す

修行中、友人と東京を訪れた私は、街を彩るネオン看板と、そのネオンが作り出す美しい夜景に、一瞬にして心を奪われました。

「今、自分が感じているこの感動を、いつか自分で創り出したい」と、その翌日、修行先に辞表を提出しました。

ネオン看板の制作には、ガラス管を美しく曲げる技術が必要です。一人前の職人になるには約10年とされ、人の2倍、1日16時間以上の努力をすれば、約5年で習得できる計算です。

しかし、そんなに長い時間をかけていては、他社には到底勝てません。私は改めて「勝てる土俵」を一から探し出さなければなりません。

平成の時代に入り、世の中にパソコンやインターネットが普及し始めると、私は、コンピュータを用いて画像を作り出す「コンピューターグラフィックス」に勝算を見出しました。



都会の夜景。後にこの写真に写る多くの看板を同社が制作することになる（写真はイメージ）

「コンピュータは、宝の山だ」。そう直観した私は、母に100万円を借金し、パソコン、ポラロイドカメラ、カラープリンター・スキャナなどの最新機器を買い揃えました。

そして、街中で壊れた看板を写真に撮り、新しい看板のデザインを作成し、その企業へ営業活動を行いました。その数は2万件に及び、鹿嶋のまちに壊れた看板はなくなりました。

■ 新たな光「LED」で世界を彩る

平成5年（1993）、日亜化学工業(株)（本社：徳島県阿南市）が、世界で初めて青色LEDを開発しました。その無限の可能性に私は心を躍らせ、1995年、業界でもいち早くLED事業を開始しました。

その後、当社はLED看板のトップランナーとして走り続け、関東の主要路線の看板や外資系高級ブランドの店舗に飾られるロゴマークのほか、近年では、新国立競技場の看板も手掛けました。

事業の拡大に伴い、平成23年（2011）には、LED部門を独立させて「レベリック株式会社」を設立、平成25年（2013）には、海外展開を開始しました。



新国立競技場（写真はイメージ）



「驚きと感動を創る」夢が詰まった工場内部

新技術導入、新型コロナウイルス感染症対策、社会貢献活動についてお聞かせください。

時代の流行を読み、一步先の未来を進む

近年、当社は、紙に代わる新しい情報伝達媒体として、「デジタルサイネージ」（電子看板）に注力しています。

デジタルサイネージは、属性に合わせた明確な広告表示が可能です。例えば、「40代サラリーマン×午後5時以降×日中の気温が30度以上」という条件を付ければ、該当した人が前を通る度、キンキンに冷えたビールの画像を流すことができます。

また、当社は新型コロナウイルス感染症が大きく広がる前から、AIセンシング技術を活用し、熱測定、マスク装着確認機能付きの小型サイネージ「FACE-THERMO」を開発・販売しました。また、飛沫防止対策になるアクリル板の加工・販売にもいち早く着手しました。

さらに、これまで培った技術を駆使し、全く新しい「LEDディスプレイ」（下図）と連動アプリの開発に成功しました。屋外でも見やすいため、大手ゼネコンの建設現場などで重宝されています。

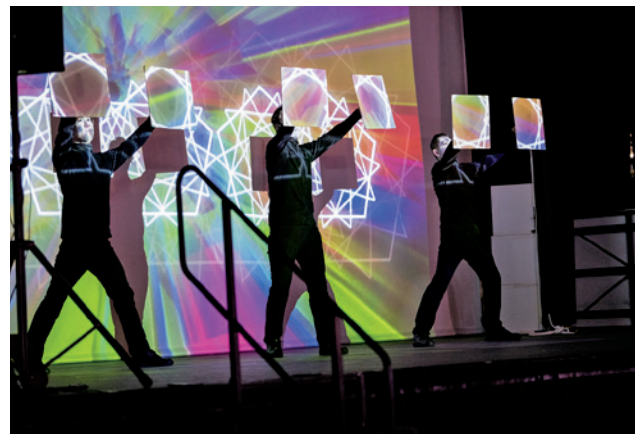


画面の自己発光により、太陽の下でも文字が見やすいように工夫されているLEDディスプレイ

光とアートの融合に新たな価値を見出す

イルミネーションの感動を超えるものとして、私は、映像や音楽で人々に感動を与える「メディアアート」に注目しています。令和2年（2020）12月21日から25日にかけて、当社は茨城県から「いばらき観光誘客推進事業」として認定を受けた「いばらきスポーツ&アートナイト」を主催しました。

期間中、県立カシマサッカースタジアムの駐車場内に設けた特設会場では、最新のデジタルテクノロジーを駆使した「音楽と映像と人間」が融合した圧巻のパフォーマンスなどが繰り広げられました。



音楽と映像と人間が融合した近未来のパフォーマンス



セイビ堂オリジナル「LEDマスク」をした子供たち

また当社は、会場を訪れた全員に当社オリジナルの「LEDマスク」をプレゼントしました。会場内では、カラフルに色を変える遊び心満点のマスクをした子供たちの笑顔が見られ、光とアートの融合に大きな可能性を感じました。

同イベントの売上の一部は、病気や戦争、災害などで心に傷を負った世界中の子供たちへ画材や絵本の寄付などを行う「子供地球基金」に寄付します。

さらに今後は、寄付を受けた子供たちの絵をデジタル化して、世界中に発信する事業も展開していきたいと考えています。

御社の経営理念についてお聞かせください。

■ 世界を変える「ビジョナリーカンパニー」へ

代表取締役役に就任した平成5年（1993）当時、私はまだ20歳で、トレンドへ俊敏に反応し、「これだ」と決めた技術を習得して行動に移すためには十分過ぎる体力と好奇心を持っていました。

LED事業を始めたのは、「LEDという“新しい光”で世界に感動を与えたい」という目標を叶えるためです。その後、当社は「各業界の世界を変えるビジョナリーカンパニーを目指す」という理念を掲げ、小さな事業のつぼみを大切に育ててきました。

周囲からは「事業を広げ過ぎだ」などと揶揄されましたが、私は「やりたいことをやる。後悔したくない」という思いで、走り続けました。

そして、現在では「サイン」と「デジタルサイン」に関わる視線解析からデザイン、3DCG・CAD、構造計算、製作加工、現場施工、品質管理、情報管理、メンテナンスまで、提供可能です。

社会の情勢を素早く判断し、製品とサービスを融合した「システム」の提供を通して、今後、世界に通用する企業に成長したいと考えています。

■ セイビ堂の使命、そして、祖父への恩返し

社長に就任して28年目の今、目指してきた理想と現実の境目が徐々に薄れ、見たかった景色が近づいていることに、大きな興奮を感じています。

全国に所在する看板施工業者との強固なネットワークの構築、国内外の製造工場との連携、部材調達の効率化、国外の最新情報の収集体制の構築など、どれも私たちの目標を達成するために、必要不可欠な要素です。

そして、これらはすべて人の手が作り出します。祖父はよく「それなりの会社には、それなりの人材しか入ってこない。そして、その人材をどう育成するかが、経営者の仕事だ」と話していました。

20歳の時には理解できなかった祖父の言葉も、今なら深く理解することができます。なぜなら、当社には志の高い、ユニークな社員が集まっているからです。

新たな価値を創造し、世界中のマーケットを動かしていくことが、私たちセイビ堂の使命であり、祖父への恩返しにもなると考えています。



新しい価値を創造し、世界中のマーケットを動かす
(写真はイメージ)

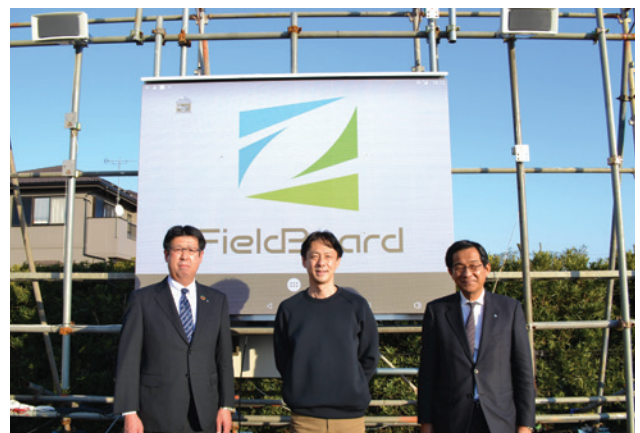
最後に今後の事業方針をお聞かせください。

■ 「驚きと感動」を世界へ、そして未来へ

当社は、今年で創業53年を迎えました。私は、祖父から受け継いだセイビ堂を、国家プロジェクトに名を残せる立派な企業に成長させることができたと自負しています。

この成長を支えてきたのは、個性豊かな社員の實力と広い人脈と最新の情報網、斬新なアイデアを形にする技術力です。

私は今後、会社が蓄えた力とマインドを次の代へ繋げる方法を考えていく必要があると感じています。将来、「阿部さんという人が、セイビ堂の創業者なんだ、すごいね」と多くの方から賞賛していただける日を夢見つつ、世界中に「驚きと感動」を提供し続けられるよう、社員とともに突き進んで参ります。



阿部社長（中央）、筑波銀行鹿嶋支店 高野支店長（左）、
聞き手・野口稔夫（右）

この度は、長時間にわたり貴重なお話をお聞かせいただき、誠にありがとうございました。御社の今後益々のご発展をご祈念いたします。